

【05】Back in the music ‘zoom’※ ～遠隔(リモート)音楽療法における間主観的繋がり的发展を模索 する～

※「Music Room」と「Music Zoom」をかけた言葉遊び

【講師】Mariana Aslan (MA, MM, LCAT,MT-BC)

【要旨本文】

「Back in the Music Zoom」は、COVID-19 パンデミックの中で、神経多様性のある子どもや青少年を対象とした音楽療法実践の様子を描いている。特に最初の数か月間、ニューヨーク市は突然の閉鎖を余儀なくされ、不安や恐怖感が蔓延した。救急車の音が 24 時間鳴り響き、病床は溢れ、人々は互いにつながることを警戒した。時が経つにつれ、一時的な隔離の計画は終わりの見えない長期の孤立へと変わり不確実性が広まった。

COVID-19 は、特に人間の発達に不可欠な社会的交流の機会を制限し、特に神経多様性のある人々に大きな影響を与えた。私たち音楽療法士の仕事はさらに重要になり、私たちは創造性をフル活用して適応し、画面を通して間主観的なつながりを築く新しい方法を見つけなければならなかった。

世界中の多くの人は、リモートプラットフォームでつながり、関わり、作業することを学ばなければならなかったし、私たち音楽療法士はクライアントと共に音楽することを促すような新しい方法を考え出す必要があった。私たちは様々なテクノロジーを試し、接続不良、音の歪みや遅延、楽器の不足に対処する方法を開発した。また、私たちは物理的なやり取りの欠如を補う方法を見つけ、メディアがもたらす利点を活用することを学び、新しい方法で共に音楽をつくることを学んだ。その結果、人間性を最優先にしながら、リモート音楽療法を通じて間主観性を育むことが可能になった。

本プレゼンテーションでは、様々なハードルを乗り越え共に遊ぶ場をつくることを可能にした3つの事例プロセスをご紹介します。幼児との音楽療法では、両親が遠隔での「コ・セラピスト」としてセッションに参加し、対人関係のダイナミクスに風を吹き込んでくれた。次に、10代女兒との実践では、パートナーシップの感覚を育むための画面共有の驚くべき利点を紹介する。最後に、10代の若者のグループが、画面上でさらに親密になり、お互いをサポートすることを学んだ方法を紹介する。

遠隔(リモート)音楽療法は、クライアントとセラピストの双方にとって充実したものであり、最初は困難な戦いと思われたが、実は意味のあるつながりを築く機会であり、困難な時期を乗り越えるための重要なリソースであったと考える。

【講師プロフィール】

ニューヨーク大学音楽療法大学院卒業。ノードフ・ロビンス公認音楽療法士。2016年にノードフ・ロビンスセンターのスタッフに加わり、2023年9月にシニア・ミュージック・セラピストとしての臨床実践と共に、大学院生のスーパーバイズやセンターの管理に携わる。病院や高齢者施設、公立学校での勤務経験あり。アルゼンチンの UCES 大学の音楽療法学科で教鞭をとる。国内や海外の学会での発表および音楽療法ジャーナルや書籍掲載など多数。